23J-am07

滋賀県店舗における多剤併用患者の実態調査およびSTTOPクライテリア該当薬剤の把握

○藤井 真吾[1], 小椋 祐二[1], 澤田 康信[1], 白川 滋大[1], 田村 晴香[1], 佐生 健宏[1] ([1]キリン堂薬局)

【目的】現在滋賀県内の調剤店舗の外来受付患者の多剤併用に関する実態と高齢者に不適切と考えられている薬剤の処方実態の把握。

【方法】滋賀県内のキリン堂調剤店舗5店舗における平成30年8月1日より来局された患者様で「同一医療機関を含む 3 科以上の医療機関受診をされている患者様」を来局順で最大10名抽出し多剤併用の実態の調査を行う。またその把握できた服用薬の中で高齢者へ不適切な薬剤をSTOPP criteriaを用いて抽出する。

【結果】各店舗から計 44 名分の情報を回収できた。このうち癌(白血病などを含む)、透析治療を受けていない65歳以上の高齢者は31名(70.5%:男性19名　女性12名)であり平均年齢は78.8歳であった。平均薬剤数は10.6種類(最大22種類)であり平均剤数は 15.3 剤(最大 35 剤)であった。受診科目では循環器科が最多であった。対象患者様の中で STOPP criteria における項目の中で BZ 系薬服用患者様が 8 名(25.8%)、同効薬剤重複服用患者様が 6 名(19.4%)、SU 剤服用患者様が 2 名(6.5%)であった。重複項目の中にはBZ系薬の重複、ループ利尿薬の重複、多科目でのステロイドの重複などが見られた。

【考察】本調査では 3 科以上受診をしている患者様という狭い条件のもとで調査を行ったが回収したデータの 7 割が 65 歳以上であり平均して 10 種類近く薬剤を服用していることが明らかになった。高齢者の有害事象は5～6種類以上になると増加しやすくなるというデータもあることからも有害事象のモニタリングや疑義照会における根拠としても有用であることが推察される。また服用薬剤は平均 15 剤でありアドヒアランスの低下目的が懸念される。さらに一元管理を行うことで不適切な薬剤を発見し疑義照会へとつなげることも可能と考えられる。